

優秀賞

優秀賞

パチンコ・パチスロファン めざせ三千万人

東和産業(株)・東京都中央区

歌田季之 二九歳(業界の部・ホール)

「一緒にやないとやらない」。昨年一二月に結婚した妻の言葉である。

パチンコ遊技人口の減少が止まらない。業界関係者であれば、業界の先行きを案じる報告である。それに留まらず、遊技場の減少、経営会社の倒産、遊技メーカーや関連設備会社の減益など、パチンコ業界を取り巻く環境は厳しい報告ばかりである。

さらに、追い撃ちをかけるように景気が後退し、原油高や材料高などにより物価は上がっている。物価が上がれば、消費者の多くは買い控えをし、市場が縮小するだろう。パチンコ遊技人口は、最盛期の五割にまで落ち込んでいる。景気後退がパチンコ業界や余暇市場に与えている影響は大である。市場が五割縮小したパチンコ業界は、まさに「淘汰の時代」である。この時代には本当の価値があるものが生き残る。

「遊技人口三〇〇万人」。これを達成することはたやすいことではない。しかし、パチンコは衣食住につぐもので、生活に潤いを与えられる「娯楽」である。パチンコは長い歴史を経た「娯楽」の代名詞で、これからも存在し続けるだろう。その可能性がきつとあるはずだ。

それでは、ここまでパチンコの遊技人口を減少させた原因は何であろうか。まず、遊技するための金額が大きくなってしまったからではないだろうか。以前パチンコユーザーだった友人が、とある日、大好きだったパチンコを止めた。

「お金がかかるから」。

彼がパチンコを止めた理由である。前述の景気後退を理由に、消費者のお金をかける優先順位が明確になってきている。そもそも本来のパチンコは身近な娯楽だったはずである。低額でも、それなりのドキドキ感が味わえる、そんな遊びだったはずだ。

私が幼い頃、父が突然、お菓子をどっさり持ち帰って来ることがあった。い

ま考えるとパチンコの景品だったのだが、幼い私にとっては大きなプレゼントだった。私が喜ぶので、父のプレゼントは持ち帰ってくる度に多くなっていた。父は日ごろの仕事から解放され、一種のドキドキ感を味わいながらパチンコを遊技し、家で待つ息子のために、換金するのではなくお菓子を持って帰ってきていたと母から後に聞いたことがある。

今のパチンコはどうであろうか。現実には明らかに「ギャンブル」の要素が強い。昔の原風景が少なくなってきたと感じてしまうのは、寂しい限りである。

次に、遊技人口減少の原因として考えられるのは、遊び方が複雑になっていくことではないだろうか。メーカー側は遊技の可能性を広げる工夫だというのが、果たしてそれはその通りであろうか。世の中は、シンプル（標準化）でわかりやすい（単純化）物に人気が集まる潮流である。ゲーム機のミニや携帯電話のシンプルフォンなどがあてはまる。高齢化が進む世の中で、新しいユーザーを掴む為には、よりわかりやすく、シンプルなパチンコが求められているのではないか。現在の遊技台は工夫の名のもとに、世の中の流れに逆行してしまっている。

いまパチンコ業界で普及させようとしている「遊パチ」は、そのシンプル且つ分かりやすい姿に近いものであるが、全てあてはまるとは言いがたい。従来の「パチンコ」より客層も利用動機も広がるような、全く新しいパチンコの形が望まれる。

そして、遊技人口を減少させた最大の理由は、残念ながら「パチンコの面白さ」が伝わっていないことである。パチンコのイメージ「ギャンブル」という評価が現実的に多い。まだまだ業界のグレーな一面やダークなイメージを払拭できていない。綺麗な内装の店舗、サービスの向上に努めている店舗が多くなってきた昨今でも、まだまだ入店するにも勇気が必要であるとか、一人では行けないと言う方が多い。

妻は休日になると、年に数回パチンコで遊ぶことがある。しかし、決まって私の休日と重なっており、一緒に並んで遊技している。

「たまには一人で行ってみたら」と促してみたことがある。

「一人じゃ行かない。一緒じゃないと行かないよ。だって、一人じゃつまらないし、何が面白いのかわからない。隣で説明とかしてくれるから面白くなるんだよ」と、妻は答えた。

その言葉を聞いて、ふと思い返してみると、私の遊技初体験も妻と同じだっ

優秀賞

た。私が初めてパチンコで遊技したのは、大学の友人の誘いで、何気なく遊んだことがきっかけだった。ルールも遊び方も分からないが、友人に言われるがままに遊んだことを覚えている。ただ、一人ではなく隣で友人が「ここがアツインだよ」「これ当たるぞ」と、何もわからない私に説明してくれていた。そんな時間が面白かったように思う。

一緒に遊技している時の妻は、とても喜怒哀楽が激しいが、とても楽しそうだ。大当りしそうな瞬間は画面に釘付けになり、本当に大当りすると、子供のようにはしゃぎするのである。そんな妻の姿は周囲に恥ずかしい感じもするが、とても微笑ましく、楽しい時間だと感じる。

パチンコの面白さは、人が伝播していくものではないだろうか。面白いと感じた人がその面白さを伝えていってほしい。パチンコ・スロットファン三〇〇〇万人は、遠い数字に思えるが、少しずつ人と人のつながりで回復できるものであると信じたい。娯楽の代名詞「パチンコ」は、根強いファンがいる限り決してなくなることはないだろうが、厳しい状況にあるのは間違いない。業界全体の取り組みで、パチンコの面白さを伝えていきたい。パチンコ業界に関わる一人として、少しでもその務めを今後も担っていかうと思う。